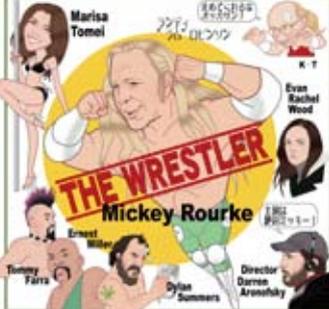
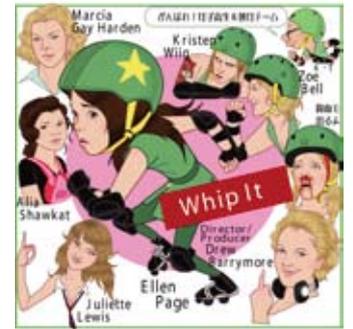


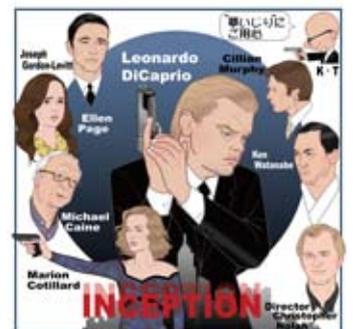


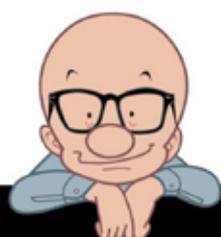
心に ひびく 映画 30選



文庫見
チヨット

高松啓二
ベストセレクション
イラスト/文 高松啓二





CONTENTS

- 1 さよなら、さよならハリウッド (2002)
- 2 ミリオンダラー・ベイビー (2004)
- 3 トルク (2004)
- 4 ヒトラー ～最期の12日間～ (2004)
- 5 Mr. & Mrs. スミス (2005)
- 6 プロデューサーズ (2005)
- 7 グッドナイト&グッドラック (2005)
- 8 ブラック・ダリア (2006)
- 9 プラダを着た悪魔 (2006)
- 10 パフューム ある人殺しの物語 (2006)
- 11 ヴディアック (2006)
- 12 グラインドハウス (2007)
- 13 ヒトラーの贖札 (2007)
- 14 シューテム・アップ (2007)
- 15 アラビアのロレンス・完全版 (2008)
- 16 ゲット スマート (2008)
- 17 ベンジャミン・バトン 数奇な人生 (2008)
- 18 インディ・ジョーンズ/クリスタル・スカルの王国 (2008)
- 19 チェンジリング (2008)
- 20 ワルキューレ (2008)
- 21 レスラー (2008)
- 22 (500)日のサマー (2009)
- 23 空気人形 (2009)
- 24 イングロリアス・バスターズ (2009)
- 25 オーケストラ! (2009)
- 26 ローラーガールズ・ダイアリー (2009)
- 27 ゾンビランド (2009)
- 28 インセプション (2010)
- 29 遠距離恋愛 彼女の決断 (2010)
- 30 キック・アス (2010)

あらすじ・スタッフ&キャスト

はじめに

最初に観た映画は、ゴジラだった気がする。以来映画が好きになり、特に中高生だった1970年代に観た映画は、その後の僕の人格形成や価値観に大きく影響を与えた。

その頃のアメリカ映画はニューシネマと呼ばれ、ベトナム戦争との関連が深く、主人公が傷ついたり死んだり、敵が巨大権力だったり……、考えさせられる内容が多かった。スクリーンの中に時代の変化を感じ、映画は僕にとって娯楽以上のもの、楽しむというよりも勉強させてもらった感が強い。

どんなに映画が好きでも、毎年公開される作品全て観るのは不可能だ。限られた時間の中で、できるだけ良い作品を選び出して観たいと思っていた。そんなとき指南役となったのが、映画雑誌の評論やコラムだった。自分の感性に近い評論家の情報を参考にしながら嗅覚を磨いていったのだ。

当時、和田誠さんや斉藤融さんの絵と文で紹介された作品はスチールよりも雰囲気伝わり、イラストレーターは、僕にとって、いつしか憧れの職業となっていた。

そして、その願いが叶い、僕はイラストレーターとなり、8年前から夕刊紙、日刊ゲンダイ（土日版）でイラストと文で映画を語るコラムを連載している。評価は星五段階で採点。今回は、リバイバルも入っているが、2004年から2010年までに劇場公開された作品の中から、僕が星4つ以上をつけ、自信を持って面白いとおすすめする30の作品をセレクトした。

僕がスクリーンから受け取った心ふるわせる思いが皆様の心にもひびくことを願っている。

1 さよなら、さよならハリウッド (2002)



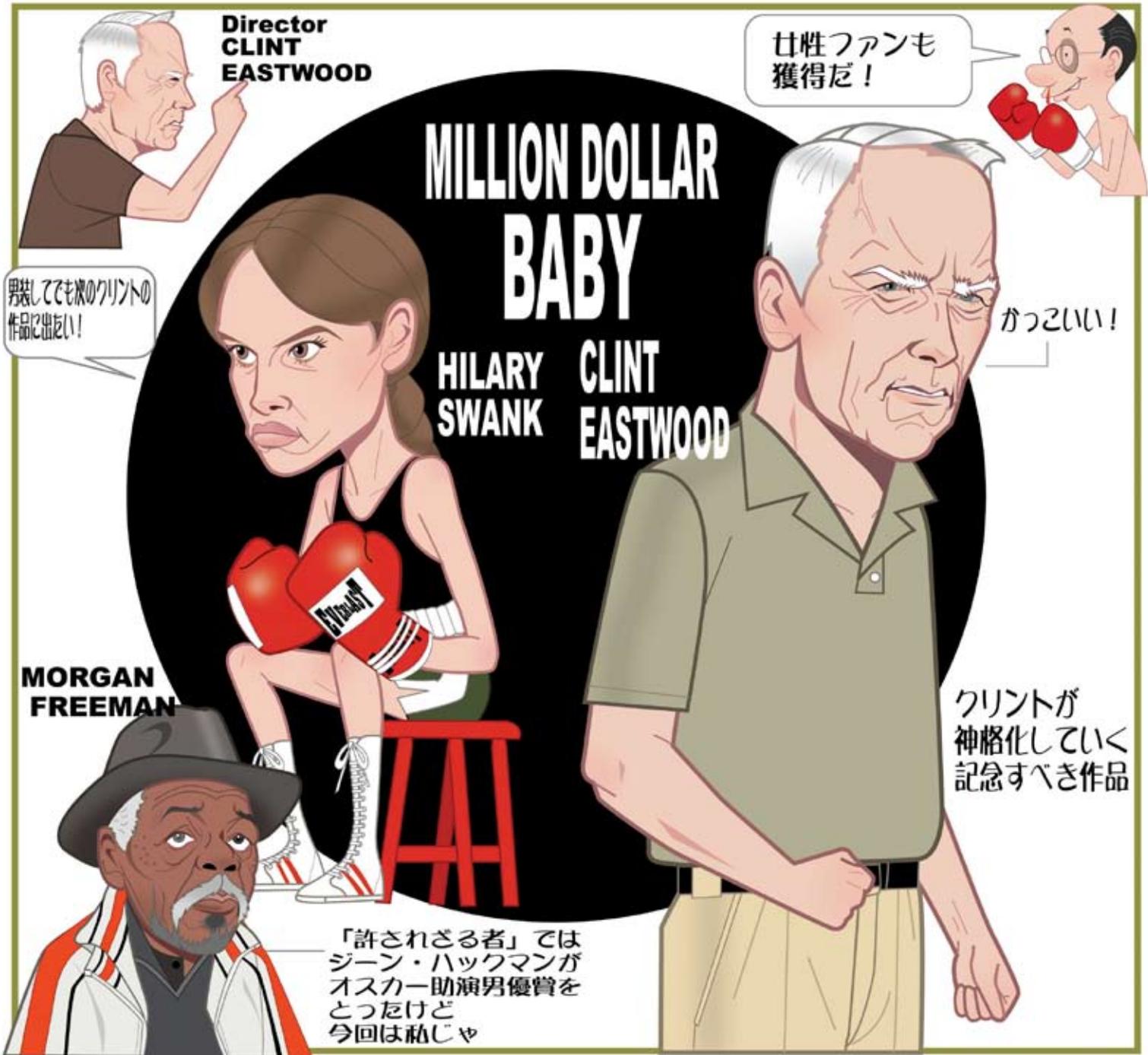
黒地に白のシンプルな文字に、古いジャズミュージックが流れるオープニングタイトルは、ウディ・アレンお約束のスタイルだ。

オスカーを2度も獲りながら今は落ち目の映画監督が、昔の女房の計らいで大作に挑戦する。しかし、久々の監督業のストレスで一時的に失明状態に……。さて、どうやって映画を完成させるか、というお話。随所に業界ネタや楽屋オチが散りばめられ、知識があればあるほど笑えるが、なくてもベタなギャグも満載なのでご心配なく。

元妻役のティナ・レオーニや往年のプレイボーイのジョージ・ハミルトンなど脇のアンサンブルも楽しく、やっぱりウディの映画は面白いと再認識した。

ボクは実は長年彼のファンだったが、一時インテリ臭い作品が続いたため、少し敬遠していた。しかし、壮年を迎えての原点回帰か、往年の喜劇を思わせる作品が増えて大変ウレシイ。楽しんで映画を撮っている感じが画面からあふれ出ていて、まるで名人の落語を聞くような、心地よく、楽しいひと時を味わえた。

2 ミリオンダラー・ベイビー (2004)



本作で2005年オスカーの話題をさらったイーストウッド。スポ根ものかと思いきや、物語は意外な方向に展開し、見終えた後に生きるという事を考えさせられてしまう。

ヒラリー・スワンク演じるハングリー精神の塊のような女性ボクサーは圧倒的な存在感を見せ、イーストウッドの枯れた演技とモーガン・フリーマンの渋さは美学にまで昇華、深く心に残る。

プログラムピクチャーのような設定に深遠なテーマを持たせるイーストウッドの製作姿勢は、70年代から何も変わってなく、ようやく評価が追いついてきた感がある(本作以降、名作を連発。そのほとんどが賞の対象になっている)。また、前受賞作の「許されざる者」ではロドニー・キングの暴行事件、本作では人の尊厳に関わる裁判と、作品がその時々で米国の抱える社会問題とリンクしているのも彼の視点の高さが伺える。

74歳(2012年3月現在81歳)になっても次々と名作を送り出すイーストウッド。ボクのようなマカロニウエスタン時代からのファンにとって喜ばしいことだ。

ラストはいつものように一人去っていく彼は、永遠の孤高のヒーローだ!

高松啓二

Keiji Takamatsu

Profile

- 1958 年 兵庫県生まれ
- 1981 年 東洋美術学校卒業
- 1987 年 イラスト事務所 (有) T-BONE STEAK 設立
- 1991 年 『プロ野球珍プレー好プレー大賞』 (フジ TV) タイトルアニメ制作
- 1999 年 個展『箱の中の映画館』を開催
- 2006 年 共著『ボディ・イン・ザ・ムービー』 (講談社)
- 2008 年 パリにて個展開催
- 2010 年 横浜そごう『シネマ・クローゼット』高松啓二イラスト原画展を開催。

現在、日刊ゲンダイ土日版にて映画コラム連載他、雑誌・
広告で活躍中。

図書館で子ども似顔絵教室も開催している。

高松啓二の世界 <http://www.geocities.co.jp/Hollywood/9116/>



ちょっと見文庫

心にひびく映画30選 高松啓二ベストセレクション

発売日 2012年3月14日

著者 高松啓二

編集 栗田孝子

装丁 2010

企画 林秀和 西門直 大西健之 梶川悦子 志田淳

発行者 小川巧次

発行所 **株式会社ヴィアックス**

〒164-8677

東京都中野区弥生町2-8-15

TEL 03-3299-6009

<http://www.viax.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

© Keiji Takamatsu 2012

この作品は、2004年から2010年にかけて日刊ゲンダイ（土日版）に連載したコラムに加筆修正し、電子版を制作しました。